



# クラブ 会報

## CLUB BULLETIN (WEEKLY)

### 鶴岡ロータリークラブ

### TSURUOKA ROTARY CLUB

D-253

創立 S 34.6.9

承認 S 34.6.27

例会場	鶴岡市馬場町	物産館3階ホール
例会日	毎週火曜日	12:30-13:30
事務所	鶴岡市馬場町	商工会議所内
		電話 0235 5775

会長	小松	広	秘
幹事	皆川	英	二
会報委員	野上	三	郎
	高内	耕	二
	板垣	喜	一
		俊	次

---

No., **1052** 1980. 4. 8 (火) (曇) No., 39

---

### ウイスター紹介

本間留芳君	食料品小売	今野金一君	和食料理	温海R.C
斎藤吉雄君	陶管販売	加藤 広君	電気工事	鶴岡西R.C

### ◆ ゲストスピーカー紹介

犬塚 又太郎氏

# LET SERVICE LIGHT THE WAY

奉仕の灯で 道を照らそう

規定審議会提案に対する賛否協議事項

提 案 者	提案No.	摘 要	賛成 ○	反対 ×	代議員 一任△
R. I 理事会	80-13	制定案 ガバナー資格条件	○		
◇	80-22	◇ 道徳律 R. I 細則 第16条削除		×	
◇	80-33	◇ 公式機関誌等	○		
◇	80-50	◇ 女子会員			△
◇	80-60	◇ 会員種類の件	○		
◇	80-96	◇ 人頭分担金	○		
オクラハマ D-575	80-101	決議案 3 H計画の特別寄付		×	
日本 習志野 D-279 地区大会	80 45	制定案 例会変更	○		
大阪 吹田 R. C	80-65	◇ 20年 65才→70才 15年に変更	○		
メキシコ D-415	80-21	◇ 青少年奉仕を第5部門に	○		
和蘭 D-158地区大会	80-25	◇ 規定審議会人員減員	○		
ニューヨーク州 D-747	80-42	◇ クラブ会長エレクトを 役員に	○		
和蘭 D-158	80-61	◇ 会員種類		×	
豪州 D-279	80-73	◇ R. A. C、I. C 出席を メークに	○		
ブラジル Ramos R. C	80-76	◇ 会員終結を 60%より36%に		×	
カリフォルニア ロスアンゼルス R. C	80-79	◇ 船舶旅行、ロータリーの ない国の旅行の出席免除に関し	○		

皆川 英二 君

- ◎鹿児島西 R. C 通報東京 R. C 通報石巻 R. C 通報
- ◎会津若松 R. C 国際ロータリー創立75周年記念誌
- ◎会津若松南 R. C 創立10周年記念式典
- ◎温海 R. C 5月10日 10周年記念エクスカッションとしてマージャン大会  
会場の都合により中止

## ◆ ゲストスピーチ

明治10年

### 西南の役と庄内

致道博物館長 犬塚 又太郎氏

西南の役と庄内について、という題を戴きましたが、私は格別郷土史研究家でもありませんので、史実にもとづかない面や、歴史の表面に出ていない事もあるかと思えます。従って雑談ということでお聞きいただきたいと思えます。

“西南の役”に入る前に序論といたしまして、明治元年の維新戦争における庄内を語らねばなりません。戊申戦争に際しまして庄内は4月24日～9月27日まで官軍の総攻撃を受けましたが、ほとんど一步も敵を庄内に入れないという状況で、ただ1ヶ所だけ現在の温海町の関川に2度ばかり足を入れましたが、すぐに撃退してしまいました、この様な善戦の末、9月27日の未明、当時16才の青年藩主が、そこの致道博物館に本陣をおいた。官軍の黒田清隆参謀に対して降伏謝罪の礼をとった訳であります。

庄内にとって非常に幸だったことは、黒田参謀に一足おくれて西郷南州翁が来鶴したことでした。どの様な処置・処罰があるかと恐れていた庄内にとって予想も出来ない様な寛大な処置ですんだということは、すべて西郷南州翁の陰の力によるものでした。この様な寛大な処分については薩長の幹部の猛烈な反対があったと言われます。たとえば、こんなに強い庄内が、我々の引き揚げた後に叛乱を起こしたらどうするんだという様な理由を上げた反対に対して南州翁は、笑いながらまた叛乱を起こしたらまた来て戦えば良いだろうと言って問題にしなかったという。

更に、有名な大村益次郎は、庄内は解体しなければならないと強く主張したと言われます。これに対しても南州翁は同じ日本人ではないか、負けましたと言って手を握ったらみな兄弟ではないか。これからの日本は庄内の様な芯の強いところが一番大事なんだ、一緒に手を握ってやろうじゃないか、と言われたといういきさつがありました。この様な点が同じ様に官軍と戦った会津や長岡と大きく違ったところでした。

先年維新戦争の戦争史研究会のメンバーが来鶴した時に聞いた話ですが、会津などでは官軍が一步領内に入ったとたん領民は官軍を歓待し道案内をしたり最後には秘密の間道から城に誘導するなど領民が官軍に協力をしてあの様な惨状を招いたといわれます。

越後の長岡には河井継之介という傑物がいて善戦をしましたが領内の領民の一致という点は少なかったようです。庄内はどうして挙藩一致の戦いが出来た

のか、武士も領民も官軍を一步も領内に入れないという勇敢な戦いの秘密はどこにあるのかということが、官軍の一致した見方であって、どうしてもこの庄内は解体するべきだという意見が強かったといわれます。それでは庄内の解体とはどういう事なのかという事が歴史家の疑問になりましたが、庄内にはかつて天保のお国替えの時も全藩を上げてそれに抗議して取りやめたという前例もあり、藩主と領民の強い結束がその原因であろうという事になり、庄内の解体とは藩主と領民との切離しが狙いではなかったかという事になりました。

もしこの時、庄内の解体が実行されていたならば庄内の姿は変わっていたらうと考えられます。西郷南州翁が来鶴しなかったら庄内の歴史は変わっていたらうと思います。

この様な事を序論として明治10年の西南の役と庄内の話に入りますが、西南の役は西郷隆盛が決起した叛乱といわれますが、史実を調べてみますと歴大な数の密偵を鹿児島に潜入させて工作をして明治10年3月23日、南州が立たざるを得ない様にもって行った結果であるという見方が強くなっています。

ところが面白い事にその前年明治9年に政府の大官連中が次々と庄内を訪ねている事実が明らかにされています。6月に内務省の大久保利道が鶴岡を訪れ、酒田を訪ね、最後には庄内旧藩士の働いている松ヶ岡開墾場を視察し、「これからの新しい日本のために協力して頑張ってもらいたい」と、ねんごろな言葉をのこして行きました。更に秋10月の末には、三条実美が大隅重信、横山資則らを引きつれて庄内を視察し、やはり最後には松ヶ岡開墾場を訪れ、ねぎらいの言葉と共に金一封を贈って行きました。

この様な事について亡くなった海音寺潮五郎先生とお会いした時、問題が出、先生も是非庄内に行つていろいろ調べてみたい事があると言っておられました。それを果さず亡くなってしまわれた。この様な政府高官の動きは何を意味するか。年が明けた明治10年に起こった西南戦争とのかかわり、そこにひそんでいる問題は大変興味のある問題でございます。

やがて勃発した西南の役には、全国の鎮台兵、新しく募集した兵力、巡査など総力を上げて九州に派遣されたが、ただ1ヶ所兵力武力を増強されたが九州には出動しないところがあった。それは仙台の鎮台で、その一部を早くも宮城・山形の県境に出動させて満を持していた。いうまでもなくこれは、庄内に対する備えであった。恐らく庄内は、西郷に呼応して立つだろうという読みのもとに多数の密偵を庄内に送りこみ、その動きを監視していた。

ところがそれに対して面白いことに鬼県令といわれた三島県令の新政府に宛た書簡が国会図書館の国立歴史資料館に残っているが、それによると「庄内は鹿児島に呼応して立つことは絶対にないと信念を持って言える。それは庄内には人物が居るからだ」と書いております。しかもその人は、西郷とは兄弟の様

な交りをしている菅実秀だ。この人が居る限り庄内は立たない。この様な庄内に密偵を入れてせん動する様な事は逆効果だから引き揚げろと申し入れて、密偵の一部を残して引き揚げさせたという事実があります。

しかし政府としてはこれで安堵する事は出来ず、小松の宮様を総督に任命して新潟県柏崎まで派遣した。いつでも仙台と呼応して庄内を討伐出来る体制を整えておきました。それではこれに対して庄内には何事もなかったかといえずと、決してそうではなく、大変な騒ぎになりました。特に少壮有為の人達は、心の師と仰ぐ先生が立ち上がった、我々はこの際是非呼応して立つべきだ、庄内が立てば東北諸藩も呼応するだろう。という様な空気が大変強く盛り上がっていたが、これに対して菅実秀は、思えば不思議な事である、あの先生が叛乱者として立ち上がったという事は分らない。それには何かがある筈だ。もし西郷先生が叛乱者と言われながらも御自分の本心から立ち上がるのであるならば、何よりもまず庄内には知らせてくる筈だ。全然それがないということは、先生の本心からの行動ではないと私は確信する。

先生の要請のないままに、ここで庄内が立ち上がったらどうなるか、誰が西郷南州の精神を後世に伝えるのか。我々は西郷先生の大精神を後世に伝えなければならぬのだ。とこれらの動きを押えて、庄内は平静を保ったといわれます。しかし政府軍は西南戦争の終結まで庄内に対する警戒と緊張を解かなかった。

9月24日城山の岩崎谷で西郷先生が最後を遂げてから1ヶ月間仙台の鎮台は宮城・山形県境や新潟に駐屯していた庄内討伐軍は、戦後1ヶ月間、庄内の空気を引きわけてはじめてその警戒を解いたと言われます。

この様に庄内の動きによっては、実に危い危機だったと思います。明治6年に西郷先生が新政府を辞して野に下って以来明治7年、8年の2年間庄内からは随分多くの若い人々が西郷先生の草廬を訪ねてその教えを受けて来て、南州の精神は広く庄内に浸透していたようです。

明治23年、先生の罪が許されて上野の山に銅像を建てるという事になったとき、庄内では、これら教えを受けて来た人々の思い出を持ちよって“南州翁遺訓”という有名な本を出したのです。

この南州翁遺訓が明治23年に庄内で発刊されたものであるということは、鶴岡と鹿児島両市が姉妹都市になるまでは鹿児島でも知っている人は少なく、西郷先生の孫でもこれが庄内です出したものと言う事を知らず、鹿児島で出されたものと思っていた様な状態でした。この様な立派な本が出版されたということからも、いかに庄内の人々が南州先生の精神を理解していたかという証拠でありましょう。

もし明治10年に庄内が鹿児島に呼応して立ち上がっていたら、南州翁遺訓を

出版出来る様な状態ではあり得なかったのではないかと思います。

とにかく新政府は、明治元年以来庄内についてはいかに強い関心と警戒の念を持っていたかという事です。何か事があれば庄内は立つだろう、庄内が叛乱すれば手強い相手であるという恐れが新政府首脳の間には強かったという事でしょう。

これらの危機を切りぬけて今日の庄内があるのは、庄内人上下の強い結束と、方向性を見定めてリードした人物が庄内に居たためだろうと海音寺潮五郎先生と話し合った事がありました。海音寺先生の南州翁百年祭の記念講演をお聞きになった方もあるかと思いますが、年を取ってあの程度の事しか言えなかったが、庄内には調べてみたい事がいろいろあるので是非行くと約束したのですが、それが実現しないままに先生は亡くなれましたが、庄内には非常に強い関心をお持ちの様でありました。

西南の役と庄内という事につきまして、この様な事もあったのだということでお話を終わらせてもらいます。

## 出 席 報 告

本日の出席	会 員 数	72名	欠席者	飯白君、金沢君、皆川君、本山君、諸橋君、中野君、西海君、熨斗君、野村君、齋藤(栄)君、齋藤(利)君、佐藤(友)君、高橋(耕)君、津田君、鷺田君、渡会君、吉野君
	出 席 数	55名		
	出 席 率	76.39%		
前回の出席	前回出席率	80.56%	メア 1ッ クブ	秋野君、池田君、板垣(広)君、川村君、嶺岸君、丹下君、上野君、吉野君一鶴岡西R.C
	修正出席数	66名		
	確定出席率	91.67%		